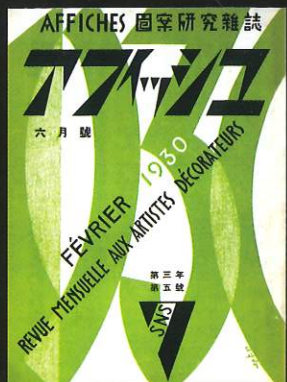
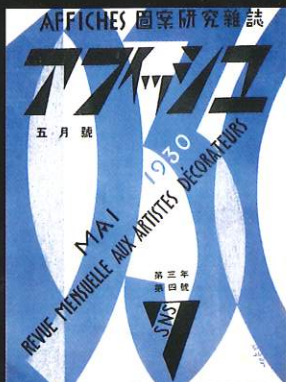
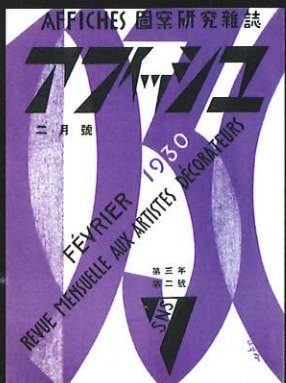


復刻版 雑誌 アフィッシュ

全14冊
別巻1

解説◎田島奈都子

国書刊行会



2009年5月刊行

A4 変形判・並製・美麗セット函入
全14冊完全復刻+別巻解説・総目次
揃定価：本体 120,000+税（分売不可）
ISBN978-4-336-05042-7

〈本書の特徴〉

- 近代日本のデザイン史や広告史において必ず言及される重要な機関誌でありながら、「幻の雑誌」としてその全容が不明だった本誌を全号完全復刻。
- デザイン・広告史のみならず、当時の文化、美術、風俗、社会史研究にも有用な第一級の基礎資料である。
- 今回復刻にあたって七人社の発行した『七人社パンフレット 1 ポスター』を参考資料として復刻し、別巻に収録。本誌理解のための一助とした。また別巻には総目次及び詳細な解説論文を収録し、読者の利用の便を図った。
- 表紙や口絵など、彩色図版はすべて原色に忠実に再現。

〈本書をお薦めしたい人々〉

美術史・デザイン史研究者、広告史・経済史研究者、日本近現代史研究者、日本社会史・風俗史・文化史研究者、デザイナー、美術館、大学・公共図書館に。

発行
国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15
Tel. 03-5970-7421 Fax. 03-5970-7427
http://www.kokusho.co.jp
e-mail:info@kokusho.co.jp

お取り扱い書店

「七人社」とは

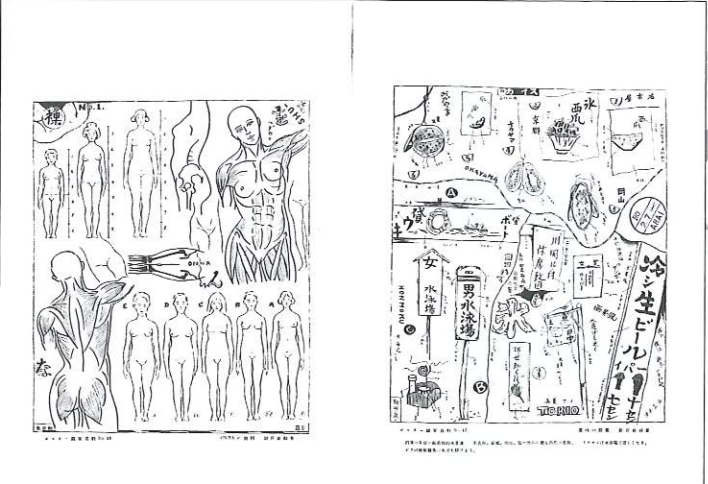
「アフィッシュ」を機関誌として発行していた七人社は、アール・ヌーヴォー調のポスターで一世を風靡した図案家杉浦非水に私淑する図案家たちによって、一九二五年五月に結成された団体である。結成時、メンバーは岸秀雄、野村昇、新井泉、市来彪、神谷駒雄、三好忠臣、田辺尚一の七人であったため七人社と命名され、一九二六年五月には東京・日本橋の三越本店で「第一回創作ポスター展覧会」を開催した。七人社はこの第一回展以降一九三六年までほぼ毎年、計十一回の展覧会を開いているが、その最後となったのは結成以来七人社の顧問であった杉浦非水の図案生活三〇周年を記念する展覧会であった。その後、七人社は目立った活動のないまま、時局の変化も相まって、一九四〇年六月に解散している。なお、七人社は名実ともに杉浦を中心組織されていたように見られがちであるが、実際の活動と機関誌『アフィッシュ』の発行は、基本的に杉浦の一番弟子である岸秀雄によって切り盛りされていた。



(第1年第2号より)

■内容見本

(第1年第3号より)



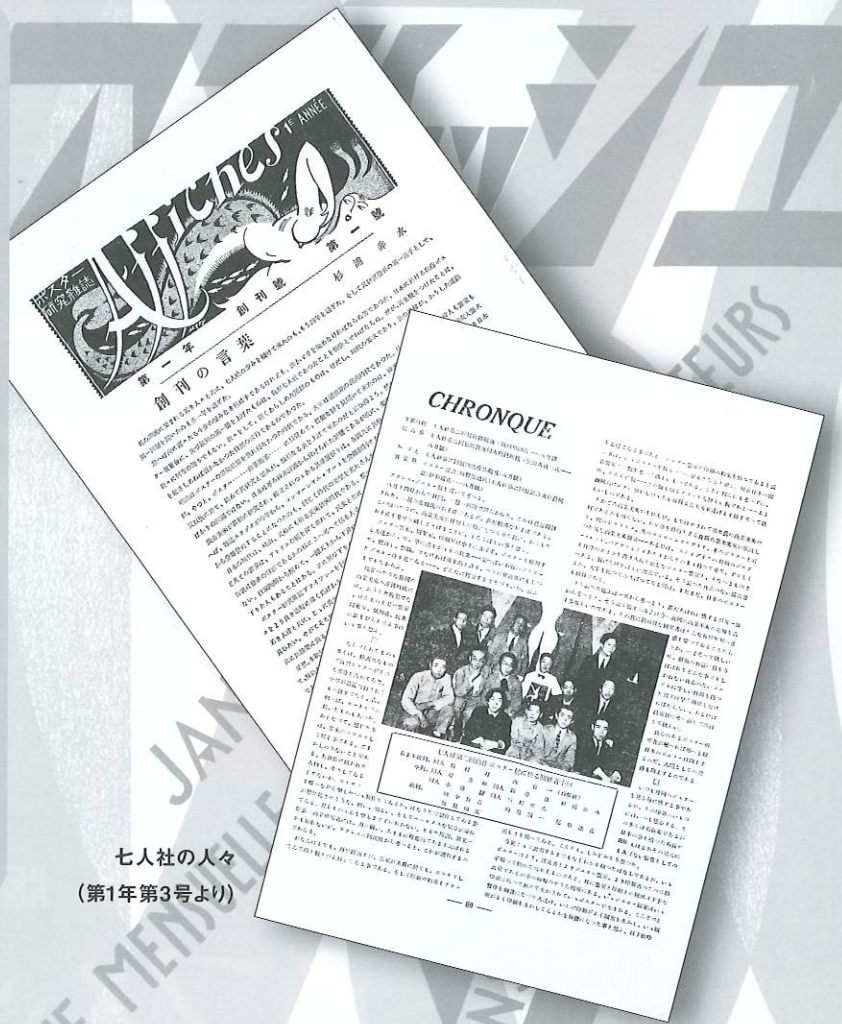
(第1年第4号より)



(第3年第2号より)

杉浦非水「創刊の言葉」より

——明治はポスターの原始状態を放れ得なかつた時代である。大正は過渡期の混沌時代であつた。日本の実業社会もお役人も画家もが、やつと、ポスター……商業美術……に目覚めて、真剣な瞳を見開いて来たのは、欧州大戦この方である。殊に関東大震災以後に於て、始めて其研究と要求が、熾烈なる炎を上げて来たのだと云ひ得よう。然かし、かゝる広告美術の発展は、独り日本ばかりの問題ではない。日本は寧ろ欧米諸国から投げられた影響であるが故に、渠等の驕尾に附している状態に他ならぬ。広告美術が真剣に研究され、確立されつゝある其進展振りは、各国共に其軌を一にして居ることを私は認めるものである。例へば、雑誌『スタデオ』が昨年『コマーシャル・アート』を分離創刊せるときに際して、日本でも、或る美術雑誌が、工芸を純美術から分離発行することになったのも、同じく時代の要望を充たさんが為の展開であらねばならぬ。



七人社の人々
(第1年第3号より)

美術・デザイン界のタイムカプセル『アフィッシュ』の開封

田島奈都子（姫路市立美術館学芸員）

一九二七年七月に創刊された『アフィッシュ』（フランス語で「ポスター」を意味する）と、その発行母体である図案家（グラフィック・デザイナー）、美術家団体「七人社」はともに戦前期日本のデザイン史や広告史を語る上では欠くことのできない存在として広く知られている。しかし、その実態は必ずしも十分に解明されておらず、特に同誌に関しては現存数が少ないことから、「幻の雑誌」という扱いを受けてきた。またわが国を代表する最初期の図案家団体の発行物であったことから、これまでは雑誌そのものが作品として取り扱われることが多かった。事実、『アフィッシュ』は美術展の会場でガラスケース越しに眺める機会があつても、実際にそれを手にとって内容を確認することは叶わず、誌名と表紙デザインを散見する割には、それ自体の研究は進んでいない。

七人社の機関誌である『アフィッシュ』には、自らが主催した展覧会に関する写真や記事、出品目録等が掲載されており、メンバーの動静や履歴については同時期に刊行されていた他誌よりも詳しく紹介されている。そのうえ、同誌には七人社以外の執筆者も多く寄稿しており、多数掲載されている国内外の作品図版や描き下ろしのイラストから得られる情報は、七人社自体のみならず、デザイン史・広告史を研究しようとする者にとっても多大なものがある。

また当然ながら、『アフィッシュ』は図案家団体の機関誌であるため、編集に当たってはさまざまな点でこだわりを持っていたものと推察される。今回の復刻に当たっては、それらが十分に感じられるよう、色彩や判型についても忠実に原本に倣っている。

一九二七年七月の創刊以降、一九三〇年七月発行の第三年第七号まで、全一四冊が刊行された『アフィッシュ』の完全復刻は、戦前期日本のデザイン界や広告界の史的な研究にとって、さらにはその他の領域にとっても文字通り八〇年前のタイムカプセルの開封であり、新たな発見や研究の展開を予感させるのである。